

研究ノート

大木喬任伝記史料「談話筆記」について

重松 優*

はじめに

明治維新以前の^{おおき たかとう}大木喬任は、大木民平と称する佐賀藩の一藩士であったが、慶応4年1月、藩命によって京都に上り、雄飛の機会を得た。ほどなくして大木は明治政府における佐賀藩の代表者のひとりに擬せられ、のちに参議兼文部卿、司法卿、枢密院議長まで栄進した。しかし、三宅雪嶺 [1917: 20] が「抱負及び才識の大なるに比して伝ふべき事に乏し」と評したほど、その業績と人生は地味であったから、これまで史家からも十分に注目されてはこなかった。国会図書館憲政資料室などが所蔵する大木喬任関係文書⁽¹⁾も、よく活用されているとはいえない。

さて、憲政資料室の大木文書中に、「談話筆記」と題される三分冊の資料がある。これは大木喬任の死後、嗣子遠吉が大木喬任伝の編纂を計画し、関係者から逸話を収集した記録である。開取りの依頼に応じたのは大隈重信、副島種臣らの元勳から、磯部四郎、沢柳政太郎ほか司法と文部の実務にあたった官僚たちなど数十名にのぼった。本資料には、周辺の人々がみた大木喬任の事績がよく描かれており、膨大な大木関係資料を読み解くうえでの、有益な道しる

べとなり得る。また、藩政期の佐賀の様子や明治前期の政治行政事情にも話は及んだので、その価値は大木喬任研究に限定されるものではない。

「談話筆記」の内容は未紹介の部分が多く、その書誌もこれまで検討されたことがなかった⁽²⁾。そこで本稿では、「談話筆記」の編纂過程と、大木遠吉が父喬任をどのように顕彰しようとしたのか明らかにして、本資料の理解に寄与したい。そのなかで、談話という資料形態の特殊性を象徴する問題として、東京遷都と大木喬任の晩年の政治活動を特に考えたい。また、末尾に談話者一覧と経歴を掲げた。利用の一助ともなれば幸いである。

一. 「談話筆記」の成立と編者内田鉄三郎

「談話筆記」の原本は、他の大木関係文書と同じように、昭和26年に国立国会図書館憲政資料室へ収蔵されたものである。墨書の原稿、計506枚が三冊に分けて装丁されている。全体を通しての頁付けがなく、参照にはいささか難がある。そして、一部の談話者直筆の覚書を除くと、本文はすべて同一人物の筆跡である。談話の処々に自称「筆記者」として登場する内田鉄三

* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程2年

郎のものであろう。

「談話筆記」の一部では、初対面の挨拶、天候をめぐる雑談から克明に訪問の様子が再現されている。内田鉄三郎の元文部次官久保田譲への説明によると、「談話筆記」編纂は「随訪随録ト云フ風テ片端カラ集メル、而シテ集取ノ上ハ他日集大成ヲスル、取舍^(格カ)ヲスル、併シ(筆者注、内田は)拾取丈ノ任デ集大成ノ重任ハ何人ニ帰スルカ知ラヌガ兎ニモ角ニモ細大漏サス、彼是撰ハス之ヲ收拾」するという様式で進められた[久保田 1900]。談話の速記と校正は内田ひとりで担任し[浜尾 1900]、出来上がった原稿は大木遠吉が自ら管理していたという[久保田 1900]。従って「談話筆記」は内田鉄三郎の編著、あるいは内田と遠吉の共編著とするのが自然であろう。

大木喬任が没したのは、明治32年9月26日である。内田鉄三郎の関係者巡りは、翌33年2月10日の高木秀臣訪問に始まり、35年4月16日の古賀廉造まで二年以上に及んだ。このあいだ内田が面会したのは少なくとも六十二名、回数にしておよそ百回、談話聞き取りができるまで幾度か足を運んだことも珍しくなかったというから、大変な労力が費やされたはずである。

さて、筆記者内田鉄三郎については、遺憾ながら断片的な事柄しかわからない。「談話筆記」そのほかに現れる内田の経歴を総合すると、彼は三重県桑名の人で、号は隍南。生没年は不詳である。学歴としては、本人が明治法律学校の寄宿舎に身を置いていたと語っており[田中 1901]、同校の機関誌にも内田の文章が掲載されている⁽³⁾。従ってまずは生徒であったと考えられるが、卒業生名簿に内田の名前はないので⁽⁴⁾、職員だった可能性も否定できない。明治

法律学校はフランス法学派の有力校で、今日の明治大学の前身である。明治25年の民法典論争では、法典反対派の壮士に対抗して演説会の護衛をしたこともあったらしい。

明治31年頃、内田鉄三郎は大木喬任のもとで働くようになった。同年4月の大木邸観桜会の招待状は内田が書いたというが、大木家での職名は不明である[楠田 1900; 久保田 1900]。当時、大木喬任は明治25年の教科書漏洩事件によって枢密院議長を引責辞任して以来、不遇の時期にあった。大木は32年9月に薨じたので、内田鉄三郎との主従関係は二年足らずで途絶したということになる。

内田鉄三郎の著書には、『如盆島』(明治24年)、『北太平洋殖民策』(27年、刊行は昭和12年)、『名家文話』(32年)、『諺海』(35年)、『琵琶歌』(43年)、『篠島』(大正元年)がある。雑誌『天地人』にも、32年以降内田による談話記事や歴史論文が散見できる。『名家文話』以降の著作には、本居豊穎や木村正辞ほか、大木喬任と近い関係にあった学者たちが寄稿しているから、内田が大木家に入って得た人脈は少なくなかったであろう。『篠島』以後の内田鉄三郎の足跡は、また不明である。

二。「談話筆記」編纂の意図と東京奠都

「談話筆記」に登場する人々は、明治政治史に大きな足跡を残したという点で、大木喬任本人に劣らぬ人物が多い。彼らの直話を記録する貴重な資料が残された事情には、大木遠吉の特異な経歴があったように考えられる。

大木遠吉は初代文部卿の子でありながら、学校の門をくぐったことがなかった。病弱だったためである。家にこもり、読書家としても知ら

れていた喬任の蔵書を読みふけった。そして、大木邸を訪れた佐賀出身の漢学者、相良励齋の左伝講義に接して史学が目覚め、『通鑑』、『大日本史』、『古史徴』をはじめ東西の歴史書を読破した〔大木 1915: 471-496〕。憲政資料室の大木文書には、「未定稿支那古史」と題される遠吉の漢文原稿百数十枚があり、遠吉がこの方面に並ならぬ力を入れていたことがわかる〔大木 年不明〕。遠吉は父喬任を失った直後、28歳という若さで伝記編纂を思い立ち、まず談話を集めるという遠大な計画を立てた。伝記はどのように書かれるべきか、資料は如何に収集されるべきか、遠吉には確固たる考えがあったのだろう。

遠吉が目的の第一としたのは、東京遷都の発議者が他ならぬ大木喬任であった、という事実を世に知らしめることだったと思われる。そもそも大木喬任が明治政府に登用される道を開いたのは、江戸開城から間もない慶応4年閏4月1日、一佐賀藩士の身で岩倉具視に建言書を提出し、江戸と京都の東西両都論を説いたことであつた。賊都へ天皇を遷座するという大胆な構想は、岩倉具視と木戸孝允を動かし、三日後の閏4月3日、大木は徴士参与職に抜擢されるのである。また、大木は同年12月からは東京府知事として復興に努めたから、東京にとってはまさに恩人といっていい。(公的に都が移されるという宣言はなかつたので、「遷都」ではなく「奠都」という表現が通用される。)

大木喬任が没する前年、明治31年は東京奠都三十周年にあたり、東京市では盛大に祝賀会が挙行された。皇居二重橋前広場には天皇后が臨幸し、上野公園へは三十万人の市民が押し寄せた。提灯、灯籠、紅白幕で飾られた市内各所でも、大名行列、山車、花火、縁日と様々な催

し物が営まれ、あまりの雑踏に鉄道馬車が運行を中止するほどであつたという。この模様は雑誌『太陽』奠都記念号に詳報されたが、大木喬任自身本人も同号の取材に応じて、東京府知事としての活動を概説している⁽⁵⁾。『太陽』奠都記念号は、のちに大木家で作られた抄録が関係文書に残っており⁽⁶⁾、大木遠吉と内田鉄三郎が東京奠都のことを、「談話筆記」編纂過程で重要視していたことを示すように思われる。

しかし、東京奠都の功労者として世間が第一に挙げる人物は、慶応4年1月に大阪遷都を提議した大久保利通であり、大木の役割がふれられることはほとんどなかつた。大木自身も『太陽』談話で自分の奠都建言について語らなかつたが、少なからず不満であつたらしい。大木は奠都祭委員の日下部三之助に当時の日記を託し、このころ編纂が進んでいた『岩倉公実記』の草稿も渡して、「是レニハ(ママ)慥カニ拙者ガ建策者デアル、名義ハタトヒ大久保利通ニ成ツテ居テモ其実ハ拙者デアルノダ」として、新聞雑誌での発表を依頼している〔日下部 1901〕⁽⁷⁾。

このような大木家側の考えに基づき、内田鉄三郎が当時の関係者たちを訪問したけれども、結果は芳しくなかつた。大木が東京奠都説の主唱者だつたと明言したのは佐賀人高木秀臣ひとりであり、土方久元は「初テ承リマス」といい、香川敬三も当時遷都の唱道者が少なくなかつた、近々建立予定の大久保利通顕彰碑でも大久保の事績とされているなどに応じた〔土方 1900; 香川 1900〕。遷都における大久保の建言書は、それほど印象的だつたのだろう。わずか三十年前のこと、それも多くの関係者が存命しておりながら、史実を明らかにするのは困難であつた⁽⁸⁾。

三. 談話の資料性と大木喬任の「大望」

「談話筆記」の編集が進むにつれ、大木喬任伝を編む難しさが、奠都問題の他にも徐々に表面化したようである。ひとつには、大木喬任自身の性格があった。大木は沈毅寡言の人であって、秘書官を務めた黒川誠一郎や中川元にも、何を考えているのかさっぱり分からないことが多かった〔黒川 1900a; 黒川 1900b; 中川 1901〕。黒川誠一郎は大木の子供たちのフランス語教育を託されるなど、大木によく引き立てられた人物だが、彼を持ってしても、大木の心中がわからない以上、伝記編纂は余程難しい、とさえ述べている。

一方で、「談話筆記」中にひとり、大木は自分にだけはよく秘密をもらした、という人物がいる。同郷佐賀出身の法律家、古賀廉造である。明治23年、大木は事業に失敗した副島種臣の家政整理を管理することになり、古賀は裁判沙汰になったこの問題をよく処理した。以来、古賀は大木の信頼を得て、自ら言うには大木の腹心となった〔古賀 1901a; 古賀 1902〕。

大木の公生活における最後の大舞台を、明治25年、第三議会におけるボアソナード民法典断行演説とするのが、多くの談話者に共通する見解である。普段は口下手といわれた大木だが、「卓を打ち或いは覚書を持ち又下に置き、頗る容体に力を込められたるを見れば説の最も熱心なりしは明らか⁽⁹⁾と、迫力ある議会演説をした。しかし古賀によると、大木はこのとき法典問題に「ソレ程大熱心ト云フノデハナイ、選挙干渉ガ第一デアツタ」〔古賀 1901b〕という。

明治25年の選挙干渉は、全国で25名の死者と388名の負傷者を出した一大事件であった。佐

賀県では全国最多の10人の犠牲が出たが、佐賀で吏党の黒幕となったのは他ならぬ大木喬任であり、古賀廉造が運動の指揮にあたった。古賀によれば、干渉の元締は周知の通り内務大臣品川弥二郎だったけれども、そもそもの立案者は大木であった。内閣において大木は首相松方正義、枢密院議長伊藤博文に次ぐ宮中席次を有しており⁽¹⁰⁾、選挙干渉に成功すればさらに政治勢力を得られるだろうという目論見である。大木には「大望」があった。「先生若シ内閣ニテ勢力ヲ得レハ自カラ総理大臣ニナツテ憲法ヲ中止シテ、帝国ニ於ケル議會ハ尚早シ、議會ハ議員トナリテ政治ヲ議スルノ資格ナキモノトノ意見ヲ懐キ居ラレタノdeal」と〔古賀 1902〕。古賀を信じるなら、大木は伊藤博文の主導で定まった国家体制を、今一度ひっくり返そうとしていたのである。

大木が果たしてそこまで視野に入れていたのか、立証するのは難しいだろう。しかし選挙干渉に深く関わっていたことは、関係文書に残された資料などから、紛れもない事実であった⁽¹¹⁾。そして、大木が憲法と国会開設に最後まで反対したこと〔高木 1900; 中島 1900〕、伊藤博文とは相容れぬ仲であったことは〔関 1901〕、古賀以外の人物も証言している。談話という資料形態は、その信頼性において特に注意を要するけれども、書翰や公文書には見られない逸話の多くは、実に魅力的である。これらをどのように扱うか、遠吉も頭を悩ませたであろう。

四. 大木喬任の顕彰をめぐって

明治37年頃、おそらく青山霊園の大木喬任墓地の落成を機に、遠吉は『紀念』と題する小冊子を関係者に配布した⁽¹²⁾。そこには「談話筆記」

から副島種臣と大隈重信の談話、また維新前後の大木喬任の日記が翻刻紹介されている。

しかし、大木遠吉が喬任について、本格的に書き始めるのは、結局奠都五十周年にあたる大正6年を待たねばならなかったようである。伝記関係と思われる資料で、「大木喬任履歴草稿」と題される原稿一綴が残っているけれども、維新史概略が書き込まれたところで途絶している²⁸。大木喬任伝の編集が頓挫した詳しい事情については、さらなる資料の発見を待ちたい。ただ、遠吉自身も明治41年に貴族院の伯爵議員に互選されて以来、有力会派「研究会」の一員として、多忙の日々を送っていた。明治43年には、「談話筆記」編集と併行して計画された大木喬任の銅像が、大審院構内に完成している。

大正6年の春、奠都五十周年記念博覧会が上野公園で開かれ、東京市は秋頃の祝賀会開催を発表した。この機会に遠吉は「東京奠都始末」を『時事新報』に掲載して、大木喬任日記をはじめとする資料を改めて翻刻紹介したのである[大木 1917c]。ところが、遠吉の連載が修了して僅かに四日後、史家岡部精一が『東京奠都の真実』を上梓する。岡部は、奠都の論功では大久保利通を第一、大木喬任・江藤新平・木戸孝允を第二とした上で、さらに前島密が慶応4年3月に大久保利通へ呈した建言書を紹介し、前島を遷都提唱者の嚆矢と定めた[岡部 1917]。

岡部の著作がきっかけとなったのか、それとも当初からの計画であったのかはわからないが、遠吉はこの年、自家の主張を繰り返した。『日本及日本人』奠都五十周年記念号には、「談話筆記」から喬任の事績にまつわる七名の談話を発表した[大木 1917a]。さらに三百頁近くの労作、『新日本と遷都』を刊行して、大木喬任が

上京して間もない慶応4年2月、前島密の建言に一ヶ月先だって、三条実美に奠都意見書を提出した事実を世に問う。これは、喬任の日記には「書ヲ作テ三条公へ奉ルト雖措而不被問」と記述されるのみで、内容がそれまで明らかでなかった資料である。

茲に一言し置きたきは、東京遷都論提唱の前後争ひなり。後藤象二郎伝には同氏を以て再先の主唱者と言ひ、江藤新平伝には同氏を以て先考より早き主唱者なるかの如く記せり。又某書（筆者注、岡部本を指す）には前島密氏を以て劈頭第一とし、同氏が明治元年三月十日附にて大久保氏に送りたる建言書を挙げたり。後藤氏の遷都に関係薄き事は普ねく人の知る所、先考の遷都論は明治元年二月十一日、三条卿に呈したる建言書の中に現はる。即ち江藤氏と京都に於て会せし以前なり [大木 1917b: 260]。

遠吉の主張は、のちに妻木忠太の論考でも支持されている（妻木忠太と岡部精一は木戸公伝記編纂所に奉職する同僚であった）。しかし今日取り上げられることは、大木父子にとって不幸なことに、少ないようである [妻木 1931; 佐々木 2001]。

おわりに

『新日本と遷都』は、その表題の通り遷都問題の発祥から天皇の東京定住までを追うものであって、もとより大木喬任の伝記という性格の著作ではない。今日に至るまで、大木喬任伝はつくられることがなかった。

そして、大正6年の奠都五十周年祝賀会は、第一次世界大戦と風水害のため二年間の延期となった。またこの年、大木遠吉は喬任より受け継いだ敷地一万一千坪という芝草手町の邸宅を売却している。『時事新報』8月16日号には、この件について遠吉の談話がある。

惜しからうたつて、未練愛着もない。六十五万円だらうが、借金の跡仕末に右から左へ素通りだから、僕の懐には鏝ひた一文だつて残らんのさ、借金だつて友人や何やの義理付合ひだが、況(ママ)か僕に迷惑(一字欠)□けまいと思つたら、その中に友人が二人も死んで仕舞ふ、証文だけが生残る、といつた因果が今報つて遂々城明け渡しと来たのだ、

あの家は僕の生まれた家ではないんだ、父が、明治廿五年に買ったもので、僕はまだ三年町の島津公の邸で生まれた、所が有名な、ソラ選挙干渉といふ奴があつて、当時政府の者は自腹を切つて吏党の為に運動費を出したもんだから、父も三年町の邸宅を売り払つた仕末なのだ、父が売つて又その子の僕が売るのも何かの因縁ぢやないか、ハツハ…………

田中平八君(筆者注、「糸平」二代目で大木邸の買主)も偉いね、来年になつて地価でも騰つたら、恨んで呉るなといつた、なアに僕にしては賽の河原で地藏様に巡り会つた様なもので、恨む所か六十五万円で有難い幸福なのだ、ハツハ、孰れ僕も捲土重来するよ

かかる金銭的な障害も、大木喬任伝編纂に影響を及ぼしたかもしれない。あるいはまた、家産整理がせまられるほど生きた政治に打ち込むことこそ、伝記出版より父の遺志にかなうのだと、遠吉は考えるに至つたのだろうか。いずれにせよ東京奠都から半世紀、遠吉は奇しくも同じ年に、父喬任の顕彰に区切りをつけ、父の家を離れたのである。

三年後、遠吉は大木喬任と同じ司法大臣となった。異色の大臣としてさらに活躍を嘱望されたが、大正15年、旅行中の京都で倒れた。享年五十四。

付表. 談話者一覧

以下、「談話筆記」に登場する順序で、談話者の名前と主要経歴を掲げる⁽¹⁴⁾。

「談話筆記」上巻

高木秀臣(旧佐賀藩士、東京控訴院検事長)、楠田英世(旧佐賀藩士、司法省明法寮頭)、本居豊穎(国学者、教部省文部省に奉職)、大島稽介(旧佐賀藩士、経歴不明)、土方久元(宮内大臣)、長森敬斐(旧佐賀藩士、司法省参事官)、蒲原源子(大木の従姉妹、経歴不明)、加太邦憲殿(大阪控訴院長)、野口□太郎(判読不能)(父親が大木の秘書官、経歴不明)、副島種臣(旧佐賀藩士、外務卿)、木村正辞(国学者、文部省司法省に奉職)、名村泰蔵(大審院長心得)、細川潤次郎(元老院議員)、江藤新作(江藤新平次男、衆議院議員)、深川亮三(旧佐賀藩士、鍋島家家扶)、石橋重朝(旧佐賀藩士、内閣統計局長)、香川敬蔵(皇后大夫兼主殿頭)、福岡義弁(旧佐賀藩士、皇室御用掛)、久保田讓(文部大臣)、城泉太郎(教師、著述家)、水尾訓和(旧小城藩士、台湾覆審院院長)、沢柳政太郎(文部次官、京大総長)、小山正武(大蔵省書記官)、浜尾新(帝大総長、文部大臣)、高野孟矩(元大木家書生、台湾総督府高等法院長、非職事件を起こす)、斎藤孝治(弁護士、東京府会議長)、渡辺玄包(検事)、中島錫胤(大審院判事、元老院議員)。

「談話筆記」中巻

石井忠恭(旧佐賀藩士、大審院評定官)、渡辺昇(元老院議員)、曲木如長(東京控訴院検事、弁護士)、中川元(文部官僚)、黒川誠一郎(司法省大書記官、大木の子女の仏語教師)、伊沢修二(文部省編輯局長、大日本教育会会長)、日下部三之助(東京府会議員、東京教育社社長)、小原重哉(検察官、元老院議員)、谷森眞男(元老院議員)、福岡孝悌(司法大輔、文部卿)、荒木博臣(旧佐賀藩士、大審院判事、森鷗外の岳

父), 辻新次 (文部次官), 由利公正 (東京府知事, 元老院議員), 増田賛 (東京府権少参事, 広島控訴院評定官), 波多野敬直 (旧小城藩士, 司法大臣, 宮内大臣), 岩村通俊殿談片 (佐賀県権令, 農商務大臣)。

「談話筆記」下巻

大島誠治 (文相秘書官), 西村茂樹 (洋学者, 侍講, 文部省編輯局長), 徳久恒範 (旧佐賀藩士, 陸軍少佐, 県知事), 関清英 (佐賀出身, 県知事, 警視總監), 関義臣 (大審院検事, 県知事), 大隈重信 (旧佐賀藩士, 総理大臣), 股野琢 (教部省出仕, 帝室博物館総長), 古賀廉造 (佐賀出身, 大審院判事, 内務省警保局長), 椿藁一郎 (三重師範学校校長, 県知事), 高木豊三 (司法次官), 富井政章 (帝大教授, 法典調査会委員), 谷干城 (陸軍中將), 西村亮吉 (徴士, 県知事), 田中不二麿 (文部大輔, 司法大臣), 古川氏潔 (旧佐賀藩士, 陸軍少佐), 中牟田倉之助 (旧佐賀藩士, 海軍中將), 磯部四郎 (大審院検事, 弁護士)。

[投稿受理日2005. 9. 30/掲載決定日2005. 11. 24]

注

- (1) 大木喬任関係資料を所蔵する文書館には, 国会図書館憲政資料室 (1063項目5041点), 明治大学博物館 (495点), 東京都公文書館 (41点) がある。
- (2) 管見のかぎりでは, 「談話筆記」はこれまで福島 [1973], 唐澤 [1984], 島内 [2002] に引用紹介されている。なお, 「談話筆記」筆者を, 福島と島内は「内田鉄二郎」, 唐沢は「鉄太郎」とするが, 「内田鉄三郎」が正しい。
- (3) 明治大学大学史料センター所蔵『法政誌叢』130号 (明治24年9月), 134号 (同12月)。特に矢代操の祭文は興味深い。
- (4) 明治法律学校『校友会名簿』を, 所蔵機関の明治大学大学史料センターで調べていただいたところ, 内田の名前は見つからないとのことであっ

た。当時の卒業率は一概に低かったそうである。他にも研究上の示唆を与えてくださった同センター職員の方々に御礼を申しあげる。

- (5) 『太陽』4巻9号, 明治31年4月25日発行。
- (6) 憲政資料室大木文書, 書類の部54-2。
- (7) 日下部は提供された資料を自社の雑誌『教育報知』(581号, 31年4月15日) に掲載して, 「成典に熱中するの幾百萬の市民は請ふ汝が喜悅の情を移して以て当時の遷都献策者たる大木伯に謝せよ」と記した。
- (8) 内田鉄三郎は香川敬三に, 近年発行になる岩倉公伝をみてほしい, と反論している。『岩倉公実記』は明治39年に刊行され, 香川敬三自身が監閲者となる。同書には岩倉に奠都建言をしたのは大木喬任, とある [多田1906: 下巻505]。
- (9) 『日本』, 明治25年5月29日号。
- (10) 『東京日日新聞』, 明治24年9月20日。
- (11) 例えば明治大学博物館大木文書・ハ32には佐賀での選挙干渉を指示する大木喬任書翰下書 (遠吉代筆) がある。
- (12) 『記念』は早稲田大学戸山図書館, 東京大学史料編纂所図書室などに所蔵されている。
- (13) 憲政資料室大木文書, 書類の部190。
- (14) 談話者の経歴については, 『明治維新人名辞典』, 『明治過去帳』, 『大正過去帳』, 『佐賀県歴史人名事典』, 『図説教育人物事典』, 『日本法曹界人物事典』, 『日本近現代人名辞典』, 『近現代人物履歴事典』, 『桑名人物事典』, 『幕末明治海外渡航者総覧』, 『読売新聞』CD-ROM版, 『楠公義祭同盟』, 『城泉太郎著作集』などを参照した。

参考文献

- 内田鉄三郎. 1891. 『如盆島』小林伝蔵.
 内田鉄三郎. 1899. 『名家文話』鉄華書院.
 内田鉄三郎. 1902. 『諺海』石上理三郎.
 内田鉄三郎. 1910. 『新撰挿詩琵琶歌』日月堂.
 内田鉄三郎. 1912. 『篠島』折戸常次郎.
 内田鉄三郎. 1937. 『北太平洋沿岸殖民策』相川龍門堂.
 大木遠吉・内田鉄三郎編. 1899-1902. 「談話筆記」憲政資料室大木文書, 書類の部69.
 大木遠吉. 1912. 『吾が抱負』實業之世界社.
 大木遠吉. 1915. 『男兒の意氣』實業之世界社.

- 大木遠吉. 1917a. 「維新創業時代」. 『日本及日本人』 714: 33-48.
- 大木遠吉. 1917b. 『新日本と遷都』 新興之日本社.
- 大木遠吉. 1917c. 「東京奠都始末」. 『時事新報』 5月15日-6月1日.
- 大木遠吉. 年不明. 「未定稿支那古史」憲政資料室大木文書, 書類の部178-1.
- 岡部精一. 1917. 『東京奠都の真相』 仁友社.
- 香川敬三. 1917. 「香川子爵談片筆記 [10月5日付, 二回目]」 「談話筆記 (上)」.
- 唐澤富太郎. 1984. 『図説教育人物事典』 ぎょうせい.
- 日下部三之助. 1901. 「日下部三之助殿談片」 「談話筆記 (中)」.
- 楠田英世. 1900. 「楠田英世殿談話 [4月26日付]」 「談話筆記 (上)」.
- 久保田讓. 1900. 「久保田讓談話」 「談話筆記 (上)」.
- 黒川誠一郎. 1901a. 「黒川誠一郎殿談片筆記 [3月27日付]」 「談話筆記 (中)」.
- 黒川誠一郎. 1901b. 「黒川誠一郎殿談片 [4月25日付]」 「談話筆記 (中)」.
- 古賀廉造. 1901a. 「古賀廉造殿談片 [6月12日付]」 「談話筆記 (下)」.
- 古賀廉造. 1901b. 「古賀廉造殿談片 [10月15日付]」 「談話筆記 (下)」.
- 古賀廉造. 1902. 「古賀廉造殿談片」 「談話筆記 (下)」.
- 佐々木克. 2001. 『江戸が東京になった日』 講談社.
- 島内嘉市. 2002. 『年譜考大木喬任』 アピアランス工房.
- 関義臣. 1901. 「関義臣殿談片筆記」 「談話筆記 (下)」.
- 高木秀臣. 1900. 「高木秀臣殿譚話 [2月20日付]」 「談話筆記 (上)」.
- 多田好問. 1906. 『岩倉公実記 (上下)』 皇后官職蔵版.
- 田中不二磨. 1901. 「田中子爵閣下御談話筆記」 「談話筆記 (下)」.
- 妻木忠太. 1931. 「大木喬任伯の建言と東京奠都」. 『歴史教育』 4巻10-12号.
- 中川元. 1901. 「中川元殿談片 [5月14日付]」 「談話筆記 (下)」.
- 中島錫胤. 1900. 「男爵中島錫胤先生御譚話拜聴筆記」 「談話筆記 (上)」.
- 浜尾新. 1900. 「浜尾新殿談片」 「談話筆記 (上)」.
- 土方久元. 1900. 「土方伯爵談片 [6月11日付]」 「談話筆記 (上)」.
- 福島正夫. 1973. 「ボアソナード博士の人格と拷問制反対運動」. 『法学セミナー』 216: 18-2.
- 三宅雪嶺. 1917. 半百年生死録. 『日本及日本人』 714: 3-32.